頴原退藏著作集

第五卷

頴原退蔵著作集　第五巻
定価　二八〇〇円
昭和五十五年七月一日印刷
昭和五十五年七月十日発行
著　者　頴原退蔵
発行者　高梨茂
印刷者　山田博
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―八―七
電話（五六一）五九二一―九
振替東京二―三四
©一九八〇　検印廃止

目次

未得・玄札・高政・松意・常矩　七
西山宗因　三三
西山宗因の連歌　九五
西山宗因の連歌補考　一二四
宗因・西鶴・惟中　一五三
西鶴の俳歴　一七二
鬼貫の俳諧精神　二二四
祇　空　二二七
柳　居——過渡期の人　二四三
紀逸と許人　二六七
暮柳舎希因　二七二

涼袋の俳歴　二八八
大江丸の人物と俳諧観　三二八
俳人としての秋成　三三三
長翠雑記　三四三
一茶の句と方言　三五〇
季吟の一夜庵再興賛　三五六
鬼貫漫筆　三六三
当麻行　三六七
落柿舎と金福寺　三七四
青蘿の金毘羅詣　三七九
『生玉万句』解説　三八二
『江戸大坂通し馬』解題　三八六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

筑紫海――長崎最古の俳書　三九一
『誹諧生駒堂』解説　三九六
『八重一重』について――西鶴に関する新資料　三九九
『印南野』解説　四一〇
玉菊追善『袖さうし』　四一八
水音の『よの柳』　四二一
鳳朗の追善集と句集　四二六
気づいたまゝ　四三四
俳諧雑記　四四二
俳諧片々録　四四九
後記　四五七

俳諧史　三

未得・玄札・高政・松意・常矩

未得

未得は石田氏、通称又左衛門、乾堂と号した。又巽庵の別号もある（『富士石』等）。江戸の人である。その伝は『滑稽太平記』に記す所が最も詳しい。これによれば常盤橋前の両替店であつたが、子細あつて江戸を立退き、相州に蟄居し、やがて剃髪して未得と号した。後再び江戸に帰り、徳元・玄札等と会して俳諧を仕習ひ、又洛の貞徳翁にも通じ、重頼・令徳に便つて撰集に入句したといふ。その貞徳に教を乞ふに至つたのはいつ頃からか判然しないが、『吾吟我集』の中に「廻文百句俳諧をつかふまつりて、貞徳といふおきなに見せにやるとて云々」といふ前書が見えるから、慶安頃の事であらう。『誹家大系図』には相州から江戸に帰つた後未得と改め、後上京して令徳に親しみ貞徳の門人となつたとある。又大野洒竹氏の「俳諧年表」（『俳諧文庫』第二篇所収）には、慶安三年の条に「石田未得江戸に帰る」とあるが、いづれもその拠る所を知らない。とにかく諸書すべて貞徳門として伝へて居る。

未得の俳諧の初見は何であるか、今之を明かにするを得ないが、重頼の『毛吹草追加』には（『毛吹草』は今手許にないのでしらべる事が出来なかつた。）、『犬子集』にはまだ入集して居ない）、

君が代の長さひろくやかざり縄

年徳を祈る願書は試筆哉
山家にや其まゝかざる門の松
年と月と日とふた三の始哉

等以下かなり多く採録されて居る（春部だけでも四十句に及んで居る）。随つて正保頃にはすでに相当作句に熟心であつた状が知られ、かつ令徳よりも先に重頼に便つて居たものらしい（令徳の『崑山集』については、今しらべる事が出来なかつたが、『崑山土塵集』中には――零本ではあるが――一句も採録されて居ない）。しかし彼が江戸俳壇に重きをなすに至つたのは寛文以後の事で、寛文五年の『雪千句』や同七年の『小相撲』等には、江戸点者として玄札と相並ぶ地位を示して居る。当時年齢から言へば未得の方が玄札より長じて居たけれども、玄札は夙く犬子集時代から活躍して居り、所謂江戸の五哲として、未得はむしろ後輩に属して居た。――江戸の五哲とは『綾錦』にあげる徳元・未得・玄札・加友・卜養の五人で、徳元が最先輩たる事はいふまでもないが、卜養の如きも寛永十二年にすでに「落髪千句」の大作があり、『埋草』（寛文三年刊、堺、成安撰）によればこの千句以来漸く都鄙に俳諧の千句が催される事になつたのだといふ。――しかも時すでに齢古稀を過ぎて居り、寛文九年八月十二日八十二歳で歿した（享年は洒竹氏の「俳諧年表」による。『綾錦』『誹家大系図』等には八十有余とある）。浅草誓願寺に墓があり、自性院未得居士と碑面にあるといふ。『一本草』はその遺著である。

『一本草』は江戸に於ける発句撰集の嚆矢とも言ふべきもので、収むる所の句数三千余、これを四季類題別に排列してある。作者は殆ど全国に亙つて四百三十八人に及び、その量からいへば優に『犬子集』を凌ぎ、句数は『玉海集』に匹敵すべき大撰集である。加之その作者は当時に於ける一流の名士を網羅し、単に量のみならず、質に於てもまさに時代を代表すべきものであつた。本書の来由については、磐

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

斎の序文に詳しく述べられて居るが、未得がかねて集めて置いた発句を、その子未琢が『一本草』と名づけて梓行したので、未得の歿後間もなく出版されたらしい。――磐斎の序は「寛文九年季秋」の日付である。――中には未得終焉の状も左の如く伝へられて居る。

五月の始つかたより未得いたハる事侍りて、水無月末の九日に既に絶入たりけるを、貞に水そゝぎなどしていきかへりにけり。予いかにくるしう侍るといへば、何のいらへもなくて、硯をこせよといへるほどに、筆を染めてつかはしければ、

胸涼しきえをまつ期の水の淡　　未得

とミづから書て我にあたへ侍る。此後は何を思へる気色もあらで、六字のミつぶやきつゝ、七月中の八日に身まかりけり。（下略。なほ『一本草』については雑誌『筑波』昭和九年一月号所載、高木蒼梧氏の「ひともと草を読みて」参照）

未得の俳壇に於ける功績は、この『一本草』を撰んだ一事のみによつても、長く伝へるに足るであらう。玄札・卜養等の古老のみならず、次の時代に活躍した調和・信章（素堂）等の消息も、また本書によつてはやく窺ひ知る事が出来るのである。

未得の句風については、『滑稽太平記』に玄札・卜養・立圃等の附方と比較し、

未得付やうは前の字を取成て、心を格外に遣ける。何れも述作とりぐ〳〵なれども皆滑稽躰なり。然るに未得門葉等ひた取成にする程に、あらぬ事共を言散らし、後々は興尽て人皆うとみしとなり。

と評して居る。即ち附合に於ては取成附（とりなしづけ）を最も得意としたらしい。取成附は古風には常套の手段とされた事で、いかなる俳諧の巻をとつても、どこかにさうした附合を見出さないものはないであらう。しかしこの『太平記』の記事によれば、未得一派は特にそれが甚しかつたらしい。事実未得の評点を見ると、

その傾向の著しい事は窺はれる。例へば未得点の或評巻（写本）に、高点を与へたものは、

此世から修羅の苦患を月もしれ
　石を引ての露隙もがな
双六に勝んとさいの目を乞て

の「双六に」の句の如き類で、これは前句の石引を双六の石に取りなした附方である。さうして彼はこの句に「さいのめを乞とはおくるゝ双六に有て、露隙もがな心よく聞へ申候」と評して居る。しかし未得自身の連句の作は、その伝はるものがあまり多くない。随つてこゝにさうした取成附の例を十分あげる事が出来ないが、とにかく取成附たると否とに拘はらず、単に連句の作品として、今重頼・徳元・玄札等と一座した百韻中から、未得の附句二、三をあげて見よう。

くらきよりあかりに向ふ屏風のゑ　徳元
　みめのわろきをはづる傾城　重頼
かづらきの神かけし知音中絶て　未得『
　きねがつゞみの音のわろさよ　元綱
つらも手もよりてしはぶく翁さび　重頼
　とがねば鬚もきれぬかみそり　未得『
磯山に夏もすゝきのほのめきて　重頼
　うつすけしきやげにゑそらごと　玄札
都出る王昭君があはれしれ　未得（写本、古俳諧集）

これらは特に取成といふ程のものではないが、打越からの転じぶりには些かその傾向が窺はれるであらう。なほ発句はもとより貞徳時代の古体の事であるから、特に異る作風としてあげる点もないが、数章を抄出してほゞその風を示す事にする。

散しけばしん気ぞさらぬ花莚　（毛吹草追加）

蚊柱をけづる蚊やりはかんな哉　（同上）

治るやむかしながらの太郎月　（花の露）

昏を待七夕つめやまりの友　（伊勢正直集）

君はふねしん羅ぞなびく国の春　（一本草）

晦日立春にてこえける年

けふきたる春やきのふのたちのまゝ　（同上）

〔註〕「たちのまゝ」は平常着のまゝの意。

来る春の座とる世界や大広間　（富士石）

なほ未得が狂歌に名が有つた事は、こゝに説くまでもなく、『古今夷曲集』には六十三首、『後撰夷曲集』にも二十五首の多数が収められ、又慶安二年自ら撰んだ家集『吾吟我集』のある事も、人のよく知る所である。紀逸の『黄昏日記』中に彼の狂歌に関する一話柄があるから、左に録して忘に備へる。

俳諧師未得神田鍋町に住居す。予が祖父一町なれば朝とく朝顔の花を送りしに、湯へ罷りしとて即答なし。押付人して返事あり、そのおくに、

朝貌を使にたびし折からに湯屋の留守にて返事をもせず

未得の子未琢もまた俳諧をよくし、坤庵と号した。磐斎は『一本草』の序に「そも〳〵俳諧の宗匠を、玉くしげ二代つたへし人はあるやなしやと、角田川の都鳥にとふに及バず、玉簾かゝるためしなし」と称して居る。天和二年三月二十日、享年七十余歳で歿した。又『一本草』には、

門松やこするゑにぎハふ孫びさし　未琢母　栄寿

君が代の長井つゞきや江戸の春　未琢子　未程

等の句が見えるから、未琢の母即ち未得の妻や、未琢の子即ち未得の孫なども、また俳諧を嗜んだらしい。なほ未得の門から出た知名の俳人には岡村不卜・樋口山夕等があり、前者は『江戸広小路』『向之岡』『続の原』等を撰んで談林時代に相当活躍した。

玄　札

玄札の伝についてもまた『滑稽太平記』に記す所が最も詳しい。高島氏、伊勢山田の人、高島利清の子であるといふ。玄札が山田の出である事は、『伊勢踊』の、

予在江戸の冬年より春は帰国すべきよしほのめかし侍りければ

来春は御帰り花か伊勢桜　玄札

とある前書によつても明かであるが、利清の子といふ事については拠る所を知らない。利清は『伊勢俳諧長帳』にも「そのかみ荒木田守武此道にふかく、（中略）中比にも利清・望一などとて俳諧にふけりたるもの云々」と言はれて居る通り、伊勢の俳人として夙くから知られ、『犬子集』にも山田之住人中望一についで多く入集し、『山田俳諧集』（慶安三年）には望一・孝晴等と共にその独吟が収められ、その他

彼の名は諸書に屢〻見る所である。しかし『伊勢正直集』等によれば、彼は杉田姓で高島姓ではない。この関係についてはなほ考ふべきであらう。さて『太平記』に従へば玄札は慶長十九年の頃江戸に出て、日本橋南室町の商家に落付き、暫く店務に従事して居たが、性来書籍を好み又俳諧を嗜んだので、人々にすゝめられて遂に医師となつた。しかも本業の医より俳諧の方がすぐれ、『犬子集』以来の撰集に洩れる事なく、本町に住んで――『綾錦』に「寛永頃　住本町四丁目」とある――点者として生活した。後には保科肥後守から五人扶持を賜はつて出入したといふ。なほこの外『太平記』には玄札に関する逸話が多く伝へられて居るが、或は句作によつて瘧を落したり、或は添削の相違を当意即妙に弁解したり等、その機才を語るものが多い。

玄札の俳系については、『綾錦』以下の諸書すべて貞徳門として伝へて居る。『大系図』には「一年上京シテ門人トナル」と明記して居るが、それはいつ頃の事であるか分らない。ともあれ彼が徳元についで早くから江戸俳壇の開拓に努め、その重鎮たる地位にあつた事は、当時の俳書を展望すれば自ら明かであらう。事実『犬子集』以来の撰集に、江戸俳人として最も屢〻入集して居るのは彼であつた。又自身にも門生野水堂白鷗と共に撰んだ『十種千句』（明暦三年成　寛文八年刊）があつた。これはすべて白鷗との両吟百韻で、一に生植、二に毛虫、三に諷、四に名所、五に鱗羽、六に廻文、七に韻字支脂の韻、八に古今・千載・新古今の歌をとつた冠字、九には源氏の巻と和漢の経籍との書題、十に詩歌人の名、それらを句毎に賦した十巻である。今その最も困難であつたらうと思はれる第十の表だけをあげて見よう。

朱子　吹はらふあらしは朱子か雪仏　　白鷗
遍照　さゆる光明遍照の庵　　玄札

仲丸　中まるき月は十方めづる夜に　同

咸用　秋の車の軸はかんよう　鷗

子儀　めづらしきもみぢの比のミゆきして　同

家隆　さけをすゝめる小鷹かりうど　札

忠度　馬にたゞのりて心やいさむらん　同

顧況　ときやうに帰るたびのかどいで　鷗

もとより全くの遊戯文字であるが、元来連俳の賦物は、此の如く全部の句に亙つて賦すべきもので、それが甚だ困難な所から、遂には形式的に発句だけとする事になつたのである。思ふに玄札はその縦横な機才を示す為に、この困難な賦物をあへて試作したものであらう。勿論この種の賦物は、玄札の外にも試みた人が多く、例へば『歌仙そろへ』の中に山岡元隣が鳥・虫・獣・恋・日本国尽等を賦したものなどは、この種の作品としてかなり骨折つたものである。しかしかうした千句の作などは他にあまり例を見ない。たゞ玄札よりはやく徳元が、寛永九年伊豆国熱海に在湯中に催した『伊豆走湯俳諧徳元千句』は、一に名所、二に謡之名、三に源氏物語、四に刀銘、五に薬種、六に虫獣、七に草木、八に魚鳥、九に鷹詞、十に茶湯を賦したものであつた。蓋し玄札の『十種千句』もまたこの徳元の作に倣ふ意があつたのであらう。随つて玄札は貞徳に直接教を乞うたとしても、一面徳元の誘掖を受けた事も多かつたらうと思はれる。

玄札の句風については、『太平記』に「上より言掛て興を顕す」と評されて居るが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com